

三 短歌を愛し、そして

学問に一生をささげた

高田保馬 (二八八三〜一九七二)



昭和8年京都大学での高田保馬
(「高田保馬博士の生涯と学説」より)

小ききは
小ききままに
花咲きぬ
野辺の小草の
安けさを

見よ

という短歌を知っていますか。



保馬の歌碑(三日月町立三日月小学校、昭和56年11月建立)

この短歌は小城郡三日月町立三日月小学校の玄関そばの石碑に刻まれています。だれが作ったのでしょうか。実は、みなさんの住むこの郷土からでた日本でも有名な学者の高田保馬という人が作ったものです。では、高田保馬という人はどんな人で、どんな勉強をしたのか少し話してみましよう。高田保馬は明治十六年(一八八三)、現在の佐賀県小城市三日月町大字金田字遠江に三男三女の末っ子として生まれました。

ちょうど熱気球の世界大会が毎年行われている嘉瀬川のすぐ西側に、生まれた家があり、明治三十年四月に今の佐賀市にあった旧制佐賀中学校に入学しました。佐賀までは往復十六キロメートルもありました。保

馬は嘉瀬川ぞいの竹やぶの細い道を、雨の日も風の日も歩いて通学しました。中学校のときには、こんな話があります。

保馬は、弁当を通学途中の竹やぶの中にかくしておいて、帰りに一人で食べることもあったそうです。友達と比べ粗末な弁当なので、友達の前で広げることができなかつたのです。でも、食べないで帰ると、母が心配するので、弁当をからにして帰っていたのです。保馬は小さいときから、人のことを考えるやさしい子だったのです。

佐賀中学の親友に、次郎物語の作者で有名な下村湖人がいて、一生友達づきあいをつづけました。保馬は下村湖人の文学的な才能のすばらしさに感心し、とうてい自分は湖人に及ばないと思っていました。

保馬は明治三十六年（一九〇三）熊本第五高等学校に入学しました。入学してから保馬はたいへん熱心に勉強し、すばらしい成績をおさめました。そして、明治四十年（一九〇七）京都帝国大学文学部哲学科に入学しました。保馬は大学では、とくに社会学と経済学に力を入れて勉強しました。この二つの領域において、日本の第一人者と言われるほどになりました。二つの学問とも第一人者としてかつやくした人はきわめてまれです。



高田保馬の生家(小城郡三日月町大字金田)

大正三年（一九一四）京都帝国大学法科大学講師となり、その後、いろいろな大学の教授をつとめました。その間、保馬は百冊にのぼる本を書いたり、たくさん論文を書いたりして学問に情熱をかたむけました。また、後輩を熱心に指導し、りっぱな学者を数多く育てていきました。

保馬は教職についた後も、年老いた母をおいて行くのはしのびないという理由で、たびたびの外国留学のチャンスを見送りました。

ロシアの大家、トルストイに会うのが若いころの夢でしたが、会うことはできませんでした。ついに、ヨーロッパやアメリカを見ることもありませんでした。

保馬は若い人に常々、「若いときに学問に熱を入れ、力を入れておくと、後は比較的楽になってくる。」と言っていました。また、後輩たちには、コツコツと一つのこと集中するように繰り返し指導し、なんでも人並みに行けるといふことで満足してはならないことをさとしていました。

保馬は学問に対する厳しさとは違ったやさしい面ももっていました。気の毒な人を見るとだまっておれない性格で、手をさしのべることもしばしばありました。また、感受性の強い人でもありました。名もない道端の雑草にも愛情を示し、よく短歌を詠みました。

三日月小学校の石碑に彫られた短歌のほか佐賀県立佐賀西高校の石碑には、

「故郷の山はなつかし 母の背に

昔眺めし 野火のもゆるも」

さらに、熊本県波野村萩岳の石碑には

「白々と 末はみそらの 雲に入る

波野の原の ほすすきのむれ」

と刻まれています。

いそがしい中にひまを見つけては短歌をつくり、その数は数千首に及び第一級の歌人とほめたたえられました。その実力が認められ、昭和三十九年に、簡単にはなれない宮中お歌会の召人として参加しました。

このように、保馬は学問に自分の一生をささげ、また、一方では短歌づくりを注ぎました。特に学問に関しては自分の弟子たちに「勉強、勉強！」という言葉を残してこの世を去ったそうです。

この言葉はまさに保馬の一生変わらない学問に取り組む姿勢を言い表していると言えるでしょう。

昭和四十七年（一九七二）郷里の三日月町において、八十八歳で永眠しました。

死ぬまで勉強を続けることは、とても大変なことですね。保馬は心から学問を愛していたといえそうですね。



保馬の歌碑(佐賀県立佐賀西高校、昭和41年11月建立)